けるプロテスタンティスムの道徳的・イデオロギー的な役割を理解する上で、重要です。フランス・プロテスタントは、その社会的状況のゆえに、社会全体の多様性を反映していません。彼らが、教会において信徒として表明する、イデオロギー的・道徳的願望は、実際にはしばしば、中流階級の願望や理想であり、それは現代社会において支配的な集団的価値観なのです。このことは第二部で、またお話ししましょう。

D．神学的・霊的・教会制度的多様化の傾向

私は、先ほど、フランスのプロテスタンティスムが、16世紀から18世紀にかけての迫害の時代に、強固な教理的・教会的団結による生き残りの戦略をとったことについて、言及しました。公的自由とブルジョアの個人主義の発展があった、19世紀には、これとは反対に、神学的・霊的・制度的多様化がみられました。この多様化は、今日なお新たな形態において存在しており、それについてここで述べたいと思います。多様化は、フランスのプロテスタンティスムにとって、幾つかの点において弱点となっていますが、フランス文明の非常に顕著な社会的・文化的特徴である、個人主義を満足させています。しかし他方では、19世紀から今日に至るまで、統一への願望も已然として強く、ある点では、多様化への傾向とバランスをとっています。私はまず第一の傾向、すなわち多様化の傾向の、現在における幾つかの要素を挙げましょう。この傾向は、過去から受け継いだものであり、今日では新たな形態をとっています。統一への願望については、第二部で取りあげることにします。

多様化への傾向は、3つの面において表されます。すなわち、1. 信仰の個人主義　2. 教理的分裂、これは教会組織自体の分裂へと帰結する可能性があります。3. 次第に外国からの影響を受けつつある、プロテスタントの現在の多様化です。これらの3点は、統一的教会組織（改革派もルター派も、シノッド）に対し、各個教会（改革派においては長老会）の役割を強める傾向にあります。よってこの3点は、会衆主義（Congrégationalisme）を助長することになります。

a．フランスにおけるプロテスタント個人主義

第1の点から話をはじめましょう。なぜなら、最も根の深いのはこの問題だからです。ここで、以下の事実を想起する必要があります。それは、1685年から1787年までの1世紀以上に及ぶ迫害の最も激しかった期間に、プロテスタントは、牧師や礼拝を維持し教会生活を営む、公的な権利を持たなかった、ということです。ただし、実際には、それらは地下活動として維持されました。家族的・個人的敬虔は、公的で目に見える形での共同組織がなくなったために、ますます重要なものとなり、この種の敬虔により、改革派は霊的生命を保ったのです。この時期以来、改革派は、ある種の宗教的個人主義の傾向を維持してきました。他方、フランス革命後の公的自由の導入以後においてさえ、改革派教会は、国家の公認としてこれに支配され、シノッドを開く権利を与えられませんでした。この禁止は、1872年まで続きます。ゆえに、本来、長老会ーシノッドという構造を有する改革派教会は、1685年から1872年までの2世紀の間、原則に従った形では機能できませんでした。シノッドの権威は、長い間、無視されてきたのです。

このような伝統により、改革派は、全国的に組織された教会の一員としてよりも、個人として、あるいは教区の一員として、考え、信じ、生きることに、より大きな重要性を認めるようになりました。定期的に礼拝に出席している者でさえ、信仰の個人的性格こそが最も重要である、と考えています。結局、多くの信徒は、公的・定期的な宗教的実践はほとんど行わず、内的なキリスト者に留まっています。宗教は、しばしば純粋に個人的な事件として捉えられ、制度や権威については、彼ら自身の教会さえそこに介入すべきではない、と見なされます。この、目立つことを避ける傾向（discrétion）、及び、宗教が個人的で密やかなものであり、その成熟は教会によらず個人の手による、と考えることは、先述の家族的伝統に対立するものではありません。それどころか、改革派の家族的伝統が世代から世代へと伝えられていったのは、外的権威の拒否や個人主義とともに、まさしくこの密やかで、目立つことをきらう宗教形態によったのです。